

仙台教区 復興支援活動ニュースレター

4→6・45通信

発行人：平賀徹夫 編集：小松史朗
 〒980-0014 仙台市青葉区本町 1-2-12
 カトリック仙台司教区事務局
 TEL 022-222-7371 FAX 022-222-7378
 義援金振替口座：02260-9-2305
 名義：カトリック仙台司教区本部事務局

横浜教区の川崎市にある鷺沼教会は、定期的に米川ベースにボランティアを送ってくださっています。今回は、その教会から派遣されて何度も参加している島上麻子さんに、記事をお願いいたしました。同時に、これから同様のことを始める仁豊野教会の動きをご紹介いたします。

また、今回が最後のお茶っこということで臨んだ八木山オリーブの会の方々の仮設住宅訪問が、最後にはならなかったという「てんまつ」をご紹介いたします。

震災から4年：まだ癒されない悲嘆の記憶

カトリック鷺沼教会 島上 麻子

1月23日から1泊2日の日程で、米川ベースに宿泊し、志津川のお茶っこに参加してきました。昨年の5月以来の参加です。

ベースに着いてまず目に入ったのは、スタッフたちが一生懸命彫ったカリタスのベストを着た「モアイ像」でした。以前から南三陸町とチリ共和国は親交があり、2013年に震災復興のシンボルとして、イースター島から本物のモアイ像が贈られました。「モアイ」とはイースター島のラパヌイ語で「未来に生きる」という意味だそうです。高さ3メートルの本物の「モアイ像」は、南三陸さんさん商店街で見ることができます。

当日ベースに宿泊したのは女性2名のみでした。時が経つにつれ、ボランティアが少なくなっていると実感しました。



二日目はお茶っこに参加するため、被災地を通過して志津川小学校に向かいました。8ヶ月ぶりに見た被災地は重機が増え、盛り土をした事により高くなった場所が目立つように感じました。



当時のままの姿で残っている、防災対策庁舎。以前は大型バスが止まっていた、大勢の人が写真を撮ったりしていました。今は静かに祈る場所になっています。



私はお茶っこの時は、オセロをしたり子供たちと遊ぶことが多かったのですが、今回は女性たちの輪の中に入れていただきました。仮設に入居して間もないひとりの女性が、震災当時の話をはじめました。「〇〇さんはどうしてる?」「流された」「〇〇さんは?」「目の前にいたのに助けられなかった」。いつもは震災の話をされない女性が、涙を流しながら答えていました。そのうち新居の話にもなりましたが、若いお母さんが「(亡くなった)息子の部屋も作らなきゃ」と話しているのを聞いて、私はどう答えればよいのかうなずくことしか出来ませんでした。

志津川の仮設は、病院が近くにあるなど立地が良いので、空家になったところに民間の仮設から引っ越してくる人が多いと伺いました。仮設から新しい生活に全員が移られるまでには、まだまだ時間がかかります。心の傷が癒えるのは、その何倍も時間がかかります。何か自分に出来ることがあれば、これからも参加させていただきたいと思っています。

恵まれた仮設訪問 最終日にならなかった最終日

八木山オリーブの会 野田和雄

復興住宅の建設が進んでいる亘理町では、自宅から私たちオリーブの会が行う「お茶っこ」に参加する人が増えています。20～30名の参加者のうち、仮設住宅の住人はわずか5名という状況です。

オリーブの会が楽しいから来てくれるだけでなく、昔からの「浜の仲間」と話し合えるメリットもあるようです。亘理町としては、新しい町内会に早くなじんで欲しいと望んでおり、「あまり居心地の良い仮設住宅に長居されると困る…」との思いがあるようです。

私たちは、仮設の状況変化に対応して、3月25日を仮設訪問の最終日とするお知らせをしました。

その3月25日の最終日は、仮設の人々が協力して、私たちの昼食を準備してくださるということでした。各家で手分けをして手作りのおこわやおかずを持ち寄り、弁当箱いっぱいにつめてくださったのです。その数、50食以上！朝早く起きて炊事を始め、心を込めて作ってくださった食事でした。

着物加工や配布も今日が最後となると気合いも入ります。笑顔で本音の話せる間柄には、3年以上の顔なじみと絆がありました。自宅から通う人が多いのは、オリーブの会の雰囲気が好きなのです。同じ浜の言葉で昔からのなじみの町内で話をしたいのです。

ホセ神父様のスペイン語の歌で盛り上がった後、記念写真を撮り、お別れをしようとした時です。数名の方が歩み出て、言いました。「これまでどおり、仮設に来て欲しい」「6月末まで集会所は使えます」と頼まれるのです。私たちが困っていると、さらに深く頭を下げ、手を床について「続けてください」と懇願されてしまいました。

とりあえず、次回の時間だけをお約束してお別れしましたが、結局、6月末まで続けることになりました。

仮設訪問後にホセ神父様と亘理教会のご厚意により、この日が「神のお告げの祭日」ということでミサに招かれました。ミサに参加して、3年間の歩みを振り返る良い機会を与えられました。

私は、亘理教会の方々に多くの支えをいただきましたが、その奥に神様の応援を感じています。このミサは、傾聴の形を考える上でも、良い恵みとなりました。

6月まで仮設住宅訪問は続きますが、この間、傾聴の形はグループ主体から個人向けに移っていきます。その後、仮設集会所から復興住宅地域へと舞台を移していく予定です。

寄り添いの形は、時と場所、相手によって常に変わっていきますが、その中で私たちに何ができるのか？

寄り添いの形を探す旅は、まだ続きそうです。



仁豊野教会からうれしいお客様

ある日、大阪・仁豊野教会の4名の方がサポートセンターを訪ねてくださいました。

「私たちは、これまで教会でバザーを行い、そこで皆さんがくださったご寄付をお送りするだけの援助活動しかできないと思っていたのですが、こちらで出してくださっている『ニュースレター』などを拝見し、『私たちも、何かできることがある』と思い始めました。それで、4年目からは、小さい教会なので、たくさんの人は無理だけど、『2、3人ずつで、定期的に行こう』ということを決めました。私たちがその第一陣です」といううれしいニュースを話してくださいました。

「最初の何もないところからの出発の場に来ることができて、うれしいです。一度、サポートセンターに来てみたいと思っていましたので」とおっしゃり、「さあ、これから大船渡ベースに行ってきます」と、元気にお出かけになりました。

私たちも、「行ってらっしゃい！」と元気な声でお送りしました。

仙台教区サポートセンターは、2011年3月16日、仙台教区の教区事務所とカテドラルのあるところに立ち上がりました。大震災の被害を被ったとはいえ、県庁や市役所などがある仙台市の中心部に位置していることから、ライフラインの復旧は早く、13日には電話が通じるようになりました。その後、日本各地からお見舞いのお電話とともに、ボランティアをしたい、何かお役に立ちたい、との電話がひっきりなしにかかり始めました。

立ち上がったばかりで、右往左往しているスタッフを助けるために来てくださった中には、阪神淡路大震災の時、救援活動で活躍された方がいらっしゃいました。このような方々の力によって、次から次へ来てくださるボランティアの方々のお世話をすることができました。

あの目のまわるような忙しさに比べ、4年たった今は、いろいろなことが組織化されました。ボランティアの方々も直接ベースへ行かれるようになり、サポートセンターを訪ねてくださる方は、ぐんと減っています。そんな中、時折サポートセンターへ足を運んでくださるボランティアの方や被災地の現状などを聞きに訪ねてくださる方と接すると、最初の頃のことを思い出し、懐かしくなります。

もし仙台へお越しの際には、お時間がございましたら仙台教区サポートセンターへお立ち寄りいただければと思います。現在のベース活動の様子や必要とされていることなどお伝えできればと思っています。

